
恋のできない僕だから

アサイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋のできない僕だから

【Nコード】

N8107A

【作者名】

アサイ

【あらすじ】

浅井草介、17歳。彼の心を理解してくれる人が一人でもいれば、僕はうれしい。初なので、ヘタクソなところはお許してください

プロローグ

どうして君は僕を好きになったの？

僕らはうまくいかないと知っていたくせに

なぜなら僕らは同じだから

人を愛することができないから

誰かを幸せにすることができないから

僕らは同じだ

他人に嫌われまいとして生きる

周囲をうかがい他人の顔色ばかり気にする

災厄の芽は先に摘み、周囲に優しさを振り撒く

でも実際は自分が大事なだけで

結局は自分だけを愛しているんだ

僕らは臆病者だ

自分が大切だから、他人に嫌われたくないから

だから他人を大切にす
いや、大切にすふりをするんだ

そして完璧を求める

99の幸福より1の不幸を気にしてしまう

完璧なモノなどあるはずもないのに

僕らは同じだから、同じであつたからこそ

君は僕の唯一の理解者で

僕は君の唯一の理解者だったんだ

君が男ならよかったのに

僕が女ならよかったのに

恋という感情に振り回されなければ

僕らはわかりあえる親友だったのに

僕が本当に欲しかったのは恋人なんかじゃない

僕の全てを理解する双子の片割れだ

この歪んだ心の檻から救い出してくれる騎士じゃなくて

その中で傷を舐めあう仲間を欲したんだ

でも君は、勇気を振り絞って

自ら檻を出て、僕に手を差し延べたんだ

でも僕は、勇気を持ってなくて

その手を振り払ったんだ

そして僕は、ただ一人の理解者を失い

幸福な未来を失い

君さえも失ったんだ

1 (前書き)

ブローグではカッコつけ過ぎました。ごめんなさい。基本こんな
ノリです。

ジャリジャリと砂利道を歩く。（なるほど、だから砂利道なのか…）などと馬鹿なことを考えてみたが、気分は限りなく沈んでいた。

この体育館裏へと続く道程が、僕にはあたかも死刑台への道のりのように感じられて、酷く憂鬱な、それでいて諦めの混じった気分になった。

前方には女の子が一人。こっちを何度もチラチラ見ながら、目的の場所へ歩いていく。不安定な砂利の上を歩くと、ポニーテールがぴよぴよ揺れる。何となしにこれは素敵だと思った。…いやむしろ最高じゃないか！

とはいえ結局は自分の変態具合に嫌気がさしながら、ふと自分が何故こんな状況に置かれているのか思い出してみた。

事の起こりはついさっき。僕は下足場で上履きに履き替えるところだった。靴の裏にくつついたのだろうか？下足場には桜の花びらが所々に落ちている。

今日は始業式。僕も高2になってしまった。全てが目新しかった1年生はあつという間に過ぎて、今ではこの校舎のボロさに不満しか出てこない。それを除けば他と変わらない、ありふれた、どこにもある公立高校の1生徒の僕に、新学期早々災難がふりかかった。

「浅井くん？」

「？……！！」

そつだ！すっかり紹介忘れていたね。僕の名前は浅井草介なんだっ

た。好物はたい焼きで、ウィーザーとバスケの好きな、どこにもいる男子高校生だ。

「……浅井くん？」「……！！……あっ！はいなんででしょうか？」
「大事な話があるんだけど、体育館裏までついてきてくれない……かな？」

突然女の子がこんなことを言ってきたのだから、男にとっちゃバクバクのシチュエーションだろう。けれど僕にしてみれば、恐怖以外の何者でもないよ。事実、僕の体からは一気に冷や汗が出た。

「……はい、わかりました」
虚ろに返事をしながら、僕はたった今脱いだ靴に、再び足を入れた。

とまあこういう感じで現在に至るわけなのだが、気付けばもう体育館裏についていて、いつの間にか二人は向かい合っていた。

「ねえ、浅井くんは今彼女いるの？」

唐突にそんなことを聞くの？と驚きながらも、僕は冷静に答えることに努めた。

「いませんけど……それが？」

「ホント！？よかったー！！」

僕的にはよくないが、どうやら彼女にとっては都合がいいらしい。

「えーっとそれでね……」

もじもじしている様子の彼女だったが、ゆっくり深呼吸すると口を開いた。

「私ね……浅井くんのが好きなんだ。だからね……付き合ってください！」

大体予想はついていたけど、いざ面と向かって言われると緊張してしまうものだった。少し照れてキョロキョロよそ見をする………いたいた。むこうにある物置の陰から、友達だろうか？二人の女子生

徒がこちらを窺っている。（あわわわわ…）彼女たちの無言の圧力によって、僕はうろたえてしまった。

けれども残念ながら僕の返事は決まっている。答えは…

「…ごめんなさい」

「……」

君の気持ちは嬉しい。確かに嬉しいよ。けどね、僕はどうしても君の気持ちに応えることはできません。僕にはね、どうしようもない欠点があるんだ。だから僕は決めたんだ。

恋などしない。一生独身だ。

……馬鹿みたいだろ？けど僕にしてみりや大真面目なことなのさ。な～んてカッコつけてそうこう考えているうちに、目の前の娘は泣き出して、鬼の形相の女友達は僕に非難の視線を投げかける。

おいおい誰だよ？男女平等なんて言い出したのは？こういう場合振っても振られても、悪いのはみな男じゃないか！！

「…ごめんなさい」

唯々謝る僕。

「謝らなくて…いいよ」

ヒクヒク言いながら答える彼女。

君は知らないのさ。

僕がどれだけ愚かで

僕がどれだけつまらなくて

僕がどれだけ臆病で

僕がどれだけ卑怯かを。

ねえ…

（どうして僕なんですか？）

2 (前書き)

某かまいたちゲームにハマってしまい、続きがかなり遅れたことを
深くお詫び申し上げます。 m ((m

災難だ。まったく災難だった。

ようやく解放されて、やっと上履きに履き替えることができた僕は、玄関を入ってすぐの掲示板の方に目を向けた。やけに騒がしい人混みがそこにはあった。

みんながこぞって覗きこみ、

「一緒だねー」

とか

「マジかよー」

とキャツキヤ言っている。

どうやら新学期のクラス分けが貼り出されているらしい。

うちの学校は文理選択の為に、2、3年は続けて同じクラスで行くので、事実上これが最後のクラス分けとなる。この大騒ぎはそれが理由ってわけ。

（とにかく僕も早く確認して自分のクラスに行きたいのだけれど、
いかんせんこの人混みじゃなあ…）

目の前の人混みは、早々にはなくならないみたいだ。なんせ結構な数の生徒かうじゃうじやいる。てか、何でまた学校はこんなに不便なやり方をするんだろう？

「俺らが楽だからに決ってんだろ」

「おわっ!？」

いきなり話しかけられて振り返ると、そこには見慣れた教師の姿が

ある。

彼の名は徳田進之介。僕も所属するバスケット部の顧問をしている国語教師だ。まるで某時代劇の主人公のような名前から、『將軍』とか『暴れん坊先生』と呼ばれている。

ちなみに40歳。未婚。

「ところで何つつ立ってんだ？」

「いや見てわかんないすか？先生たちがあんな風にクラス分けを連絡するから、この有り様っすよ。」「がはは！そーかそーか、まあいいじゃねえか」

正直ホントに迷惑しているのだが、この人には笑ってごまかす悪いクセがある。

「おかげで早く教室に行きたいのに、この様っすよ」

「まあ確かにこれはなあ……」

この会話の間にも、人混みはどんどん膨れ上がり、玄関が詰まってしまった状態だ。これじゃあもうどうしようもない……。

「あー、あれだ。お前は3組だぞ」

「ふーん……………はあ！？」

いきなり何言い出すんだコイツ？

「てか何で知ってんの？それよりも、知ってるならはやく言えよ！」完璧に教師への敬意を欠いた暴言で、僕は將軍に言い寄った。

「がはは！悪い悪い（＾Ｏ＾）ちなみにあれだ。俺3組の副担ね」

（ま　　じ　　か　　よ）

新学期の始まり。新しいクラスとその顔ぶれ。期待と不安が入り混じった心、何よりも好奇心がその新たな教室へ向かうのを、きつと早足にしようんだらう。

僕はそれを意識的に抑えながら、ゆっくりと歩く。そして窓の外を眺める。

開け放たれた窓のむこうには間近に桜並木。それらはまるで、両手を広げて僕らを祝福しているように見える。

僕は思う。

それらは唯唯美しいと。

風によって運ばれた、一枚の桜の花びらが、制服に張り付いた。それをつまんで、僕は見つめた。花びらの薄ピンク色に、生々しい美しさを感じる。

『桜の下には死体が埋まっている』

だからあんな色がでる。そんな迷信を聞いたことがある。

でも僕にしてみれば、桜の木そのものに血が流れていて、彼らが巨大で、それでいて繊細な、春の間だけ生きることのできる生き物のように思えた。

僕は好きだ。

この自然の美しさが。そしてそれらに触れることが。

でもその一方で、そんな美しいものたちを見る度に、僕は自分の醜さを強く感じるんだ。

そしてその度に自分を消し去りたくなる。

自然が何故美しいかわかるかい？

それは、ヒトの手で作り出せないからじゃない。

ヒトが醜いから引き立つ。
ただそれだけだよ。

3 (前書き)

話の進展の遅さに、もはや自分で読んでてもイライラしますね。

（うへえ。…もうへとへとだ）

僕は今教室に向かおうとしているところなのだけど、ある障害が僕を、いや、全生徒を待ち構えていた。

なんというか…、

この学校は敷地がすごく狭い。

創設者は並々ならぬ教育心の持ち主ではあったが、財力は並々だった。

おかげで小さな土地しか手に入らず、校庭と諸々の施設をつくつたら、もうあまりスペースがないわけで…。

「だからって5階建てにしなくてもいいだろ…」

エレベーターが無いので、どうしても地道にあがるしかない…。少しぐつたりしながらも5階に着くと、そこはものすごく騒がしかった。

たった一つしかない校舎は1階から、

職員室や事務室に学食・購買

3年生教室

生物室や音楽室などの特別教室

1年生教室

2年生教室

の順になっている。

3年教室がこんな位置にあるのは、受験を考えて少しでも静かで負担の少ない環境をということらしく、そのため3階とまだ1年生が不在の4階の静けさとあいまって、5階は異様な盛り上がりを見せていた。

廊下で騒いでいる女子のグループ、他クラス巡りをする男子。新学期独特の雰囲気、僕も自然と顔が綻んだ。

「あーっ！おはよ！終業式以来だね」

突然声をかけられたもんだから、びっくりして振り向くと踊り場に見知った女の子がいた。はしのいせ端野伊勢

肩まである薄く茶色が入った髪に、みんなと少し色の違った綺麗な瞳。フランス人の血が入ったクォーターだと聞いたことがある。

男子生徒の間で秘密裏に存在する、校内マドンナランキング。彼女はそのトップ3にも入っていた。当にトップランカー。

——つまりすごく可愛いんだよこれが。

でも残念。

僕の親友、もとい悪友の藤枝蚩太郎の彼女なんだ。

まあ恋愛対象外ってことで、今は僕が普通に会話のできる数少ない女性の人ってわけ。

「おー、おはよ」

「今来たところ？」

「うん。生徒玄関がかなり混んでてさ。しかも3組だから5階だよ……」

僕はこれから毎日上がることになるこの階段を、憎らしげに見つめながら言った。見れば見るほど性悪極まりない。

「うそっ！？わたしも3組だよ！」

「ほんと！？よかった、知り合いいたよー」

やっぱり知ってるヤツが同じクラスだと安心する。さすがに独りは心細いもんな。

教室につくまでの間に、お互いに春休み中のことを話す。

まあどっちも部活漬けだったから、練習がキツかったとか、練習試合に勝ったとか…、まあその程度のことを喋ってた。

そうする間も周りの男どもは、高校生らしく理性的で分別のあるいやらしい目つきで、端野を見つめている。

学校一の美少女が歩くと、周りはそれに見とれてしまう…。

そんな漫画みたいなことがあるわけない。僕はそう思っていた――が、実際にいた。

生徒も教師も他校生も警察官も犬猫さえも、男はみんな彼女に見とれてしまった。

そんな彼女は僕にしてみたら、『最も身近にいる、有名人以上に有名人』だった。

事実、いろんなところで何度もスカウトされているらしいが、全て断っているそうだ。

とにかく端野は紛れもなく、学校の美少女だった。

そうこうするうちに僕は、『2の3』の札のかけられた扉の前に立った。

「誰か知り合いいた？」僕は名簿をまだ見ていない。クラスの面子はさっぱりわからなかった。

「わかんない…。わたしは友達に見てもらったから、他に誰がいるかは知らないんだ」
少し困った顔をして端野は答えた。無理もない、下はあの騒ぎだもんな。

加えて僕らの教室は最上階の端っこ、廊下の突き当たりに入口があるため、廊下に面した窓もなく、中をうかがい知ることが出来ない造りとなっていた。

（とにかく中に入るしかないってことか…）

僕は意を決して、扉を引いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8107a/>

恋のできない僕だから

2011年1月27日05時59分発行